

平成26年度 清瀬市立 学校 第2回学校関係者評価表

<b>学校教育目標</b>	健康(よりたくましく、心身をきたえる) 愛情(より豊かな心をつちかう) 学力(より深く、自ら学ぶ) 勤労(よりよくはたらき、責任をはたす)
<b>目指す学校像(ビジョン)</b>	1. 確かな学力を身につける(指導法の工夫により基礎・基本的な知識や技術を実身に付けさせる) 2. 自己実現に向けて努力する(キャリア教育を通して将来について考え、社会に出て通用する生徒を育てる) 3. 豊かな心や健やかな体を育成する。(生命尊重の教育を実践し、全教育活動を通じて心身を鍛える)
<b>【目指す児童・生徒像】</b>	1. 豊かな情操を育む生徒 2. 自ら考え判断し行動する生徒 3. 社会性のある生徒 4. 心身ともに健康な生徒
<b>【目指す教師像】</b>	1. 共に力を出し合う教師 2. 課題を発見し、改善に繋げる教師 3. 自己研鑽に励み自らを高める教師

前年度までの学校経営上の成果と課題

1. 教職員の異動が多いため、組織を再構築し、課題解決へ組織で動く体制を整える。また、職層に応じた役割を明確にする。
2. 基本的な生活習慣の確立が長年の課題となっている。生徒理解や家庭地域との連携を密にし、根気強く指導にあたり、自ら規律遵守ができる生徒を育成する。

	具体的方策	第2回評価		課題と次年度以降の対策	第2回学校関係者評価
		努力目標	成果目標		
確かな学力の向上	校内研修を通して特別支援教育や授業研究を行い、授業規律の確立と授業力を高める。	3	4	特別支援教育を研修の柱として、月1回の研修会(全体会・分科会)や授業研究を計画的に実施することができ、ねらいである個に応じた指導ができつつある。その成果は、生徒の落ち着きとなって校内生活で顕著に現れているが、さらに一歩進んだ研修で、教員の資質向上を図る必要がある。	研修を生かした実践により個に応じた指導ができつつあり、来年度へ引き継ぐ形となった。授業規律の遵守が生徒の落ち着きや学力向上に現れている。しかし、都の平均と比較すれば、基礎的・基本的な学習内容の定着と底上げの取組が必要である。同時に、学力向上に直結する分かる授業を展開させることが必要である。
	漢字検定、数学検定、英語検定などを定期的に実施し、能力の伸長と学習意欲を向上させる。	3	3	各検定試験(英語・漢字・数学)の合格率は、4、5級については増加したが、3級以上の合格率は以前として低い。検定試験が学習意欲へと結びつけるのは、日頃の授業の充実や放課後補習などの工夫が必要である。	各検定試験(英語・漢字・数学)を全校で取り組むことや小学校から継続して検定試験に挑戦させることは、学習意欲向上につながる。しかし、最終的な目的は、合格であり、生徒が意欲的に検定試験に挑戦し続けるには、日頃の授業の充実や放課後補習などの工夫が課題として残った。
豊かな心の育成	1年生・2年生で職場体験(3日間)の実施や外部人材を活用してのキャリア教育を実施する。	4	4	1、2年生ともに3日間の職場体験を実施することができた。さらに、事前指導に外部人材の活用や事後指導では、壁新聞や発表により様々な職種への理解が深まったが、キャリア教育＝職場体験ではなく、年間を通してキャリア教育を推進していく体制を整える必要がある。	1、2年生は、3日間の職場体験を通して、職業や社会のルールについて深く学ぶことができていた。その教育的効果は、日頃の学校生活の中に顕著に現れている。また、職場体験を行うことにより、地域との連携が密になり、地域の一員としての自覚と責任をもつ機会となる。
	年3回のアンケートの実施、SCによる面接や定期的に相談週間を設け、実態を適切に把握し、問題の未然防止に繋げる。	4	4	2学期末にQ-Uテストを実施し、学級内における人間関係や内面の把握に役だったが、来年度は効果的な活用が課題として残った。Q-Uテストのみに頼らず、相談週間や挨拶運動などを組織的に行う必要がある。	Q-Uテストの活用により表面に現れない内面を把握することができたが、Q-Uテストが全てではなく、日頃からアンテナを高くし、常に情報を共有していくことが問題の未然防止・早期解決となる。来年度は、相談週間、挨拶運動など学校が目標を明確にして、組織的な取組が必要である。
健やかな体の育成	部活動では、技術向上に繋がる外部指導員の活用をする。部活動、地域クラブへの参加により運動習慣と体力向上を図る。	3	4	オリンピック教育推進校としてTT授業、補強運動の工夫により体育好きが増えたが、まだ積極的に様々な場面で運動に親むところまで拡大できていない。自己運動能力向上や健康増進への意識を高める取組が必要である。また、保護者地域との連携も不可欠である。	外部指導員を活用して、技術向上を図った成果は、大会の結果や練習内容に現れた。全ての部活動に外部指導員が配置されているわけではなく、平等な指導には課題がある。授業の工夫は、保健体育の授業への積極的な参加に現れ、昨年度に比べ、見学者がかなり減少した。
	個に応じたTTの授業、部活動などで持久走の自主練習を取り入れ、100%のマラソン大会参加率を目指す。	4	4	実際のマラソン大会への参加率は、昨年度よりも若干増え、全クラス90%を越えた。常に新しい記録を生徒昇降口に掲示していったのが有効であった。走ることに抵抗はなくなったが、体力テストでは依然として持久力が低く、授業や行事での工夫が必要である。	精神力、持久力などの力がマラソンを通して身に付けることができた。参加率95%や授業開始前のランニングにより走ることに抵抗はなくなった。しかし、体力テストでの持久走が横ばいであり、日頃の実践が体力テストの数値に直接結びつく工夫が必要である。
本校の特色①	全教員が年間2回以上の研究授業を行う。	4	4	年2回、全教員による授業研究は実施でき、授業力改善や授業研究への意識が高まった。今後は、学力向上に結びつく授業研究を計画的組織的に行っていく必要がある。	年2回の授業研究は、継続していく。しかし、学力調査や定期考査を分析し、指導の重点化を図る必要がある。授業研究がマンネリ化せず、授業改善に結びつくために、テーマを決め検証していく必要がある。
	教科、道徳、行事のねらいに応じた外部人材を活用し、目標達成や生徒の変容に繋げる。	4	4	各学年のねらいに応じた外部人材を活用することができた。しかし、一時的なものではなく継続して成果を得るためには、外部人材による教育的効果のねらいを設定することが必要である。	外部人材活用により生徒が将来の夢や希望をもつ機会となっていることは事実であるが、精選し、確実にねらいを達成させることも必要である。また、外部人材活用は、事前・事後指導の充実や実態に応じた内容であることが大切である。
本校の特色②	全校規模でグリーン運動、あいさつ運動、リサイクル運動を行う。	4	4	生徒会を中心とした活動は、命のフォーラムの発表など活性化したが、生徒会の活動が固定化傾向にある。外部機関と連携や校内での新たな取組など、さらに工夫が必要である。	一つ一つの生徒会活動に沢山の生徒を参加させることができた。しかし、実施期間を明確にし、活性化させるためには、年度当初に活動の年間計画が必要である。
	年間2回の街頭募金を東北の義援金として実施する東日本大震災の勉強を実施して募金活動により多くの生徒の参加を促す。	3	3	ユニセフ募金活動(2回)以外に広島県への義援金募金活動を実施することができたが、募金活動のみがボランティア活動となっている。地域清掃、古着回収などおおくの体験をさせる機会を与え、学びも増やしたい。	生徒会の募金活動は、学校の特色として継続するが、活動が固定化している傾向にある。近隣の小学校、地域、企業との連携や校内で全校生徒が取り組める活動を考えていく必要がある。